

Title	さいたま上尾キャンパスにおける聖学院大学形成の歴史的意味
Author(s)	阿部, 洋治
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume22, 2007.3 : 122-132
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3241
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

さいたま上尾キャンパスにおける聖学院大学形成の歴史的意味

阿部 洋治

はじめに

女子聖学院短期大学から聖学院大学の創設と形成へと至る上尾キャンパスの歩みは、日本のキリスト教教育における注目すべき意義深いチャレンジでありました。これまでの日本におけるキリスト教学校の多くは個人的なパイアティズムによつて支えられて来ました。先人たちの信仰が若者たちにキリスト教的な影響力をもっていたということは尊重すべきことであり、今日キリスト教学校におけるクリスチャン教員および職員たちが、キリスト者として、児童、生徒、学生たちにかかる使命と役割を担うべきかを自問しなければならぬ所以でもあります。しかしながら、日本におけるキリスト教学校の問題点の一つは、キリスト教教育の内実化を少数のキリスト者個々人のパイアティズムに委ねて来たところにあると思われます。女子聖学院短大以来、さいたま上尾キャンパスにおけるキリスト教大学形成の特徴は、常にこのことを自覚しつつ取り組んで来たことにあります。自我自賛や自己満足的になることを戒めなければなりません、さいたま上尾キャンパスにおけるこの取り組みは日本におけるキリスト

教学校の歴史において画期的な意味をもっているのではないだろうか。

言うまでもなく、一つの組織が有機的な統一体となるためには、明確な理念が不可欠であり、その理念に基づく組織の運営と形成のためには、その理念を具体化するための論理と実践が必要になります。すなわち、それが、いわゆる「教育の神学」といふべきものであります。それは、キリスト教学校の運営と形成をめぐる神学的な取り組みであります。しかし、この神学的取り組みは、単にキリスト教的理想論を展開することではありません。確かに、それは、信仰に基づく理想を追求するものではありませんが、その理想を学校の運営と形成において結実させて行くための具体的、実践的方策を生み出す理論を構築する試みであります。これは、個々のクリスチャンの信仰と対立するものではなく、むしろそれを学校の運営と形成の中でより良く生かす取り組みであります。

さいたま上尾キャンパスにおいては、こうした取り組みがどのように展開されて来たか、このことを歴史に則して明らかにして見たいと思います。

初期の学風——自由、人間尊重、伝道的学風

まずさいたま上尾キャンパスがどのような学風をもつて開始されたか。これについては、昭和一三年の『ともがき』二六号に記された「人間尊重の精神による教育」という初代学長の小田信人先生の文章から捉えることができます。この中で先生は以下のように記しておられます。

「もとより宗教的信仰というものは、或知識を教える様に教えるものではない。以心伝心、靈の感化によって、魂ひらけたる時、体験されるべきものであるから、言葉によるよりも、態度によって伝えられるものである」。

「(中略) 聖書科をもつて信仰を教えるものではない。勿論、聖書を神の言葉として受け入れる教師の厳肅なる信仰態度が、知らず知らずの間に教えられる者に、何ものかを与えるであろう事は云う迄もない。ここで忘れてならぬ事は信仰を伝え、与え得るのは学科の故ではなく、教師の信仰の故であるという事である。聖書の知識を如何に巧みに教えても信仰を植えつけ得るとは限らない。」「如何なる学科を教えるにしても教師に信仰があり、信念の人であるならば、その精神と生活態度とは、生徒を感化せずには措かない。それ故にあらゆる学科を通して、宗教的感化を与え、信仰を伝えるものと考えるべきであつて、これが又教師の重大な責任である」『先人のもとむるところ』八〇—八二頁より)。

この文章は、短大が設立される遙か昔のものではありますが、小田先生は、ここに記された精神をもつて女子聖短大の運営と形成にあたられたと思われまふ。このことは、小田先生時代の短大についての幾人かの人たちの感想から伺うことができます。当時、若くして英文科に赴任して小田先生の人格にふれ、先生が逝去された後になつて洗礼を受けることになつた戸田直子教授は、小田先生との初めての面接のことを想起して、次のように記しています。「この日、いつ帰ってくるかも分からない私を学校で待つていて下さつた小田先生は、教会出席についても何もおっしゃらずに、その時が来るのをひたすら待つていて下さつたのです。(中略) 私のようなかたくなな者に働きかける役目を神から委ねられた小田先生は、あせらず、たゆまず、限らない愛で私を包み、忍耐強くその日が来るのを待つて下さいました」(小田信人先生召天三周年記念文集『死はいのちに』一六三頁)。戸田教授のこうした感想文とおして、私たちは、上記の文章に表された小田先生の人柄とそれによつて育成された女子聖短大の初期の自由と人間尊重の学風を思い見ることができのではないのでしょうか。

こうした学風は、『女子聖学院短大報』創刊号(一九七〇年十一月五日)に記された浅原六郎先生の感想文からも

何うことができます。「この短大では、学長はじめ、教職員すべてが、権力的でなく、さわやかに人間的で、厭味がない。キリスト教の信仰があるか、ないか、こんなことに関係なく、皆いい人柄だ」。浅原先生のこの文章は、一人びとりがその人自身として大切に受け入れられている自由と人間尊重の学風を適切に表現していると思います。こうした学風はキリスト教信仰に対する無関心から生まれるものではありません。事実、小田先生は、そういう人ではなく、教育者であると同時に敬虔な牧師でもありました。神への真実な敬虔さは人を拒否したり拘束したりするのではなく、分け隔てなく人を受け入れかつ解放するのです。ある教員は、就任してしばらくは、小田先生が牧師であることをまったく知らなかったということです。そして、「牧師臭くない牧師」であつたと感想を述べています。第二代目の宗教部長となつた高橋泰二牧師も、礼拝における小田先生の祈りにおける厳肅なる敬虔さに加え、礼拝後にもたれる月に一度の学長室における交わりの楽しさについて記しています（『女子聖学院短大報』第二号）。また、学生の一人が、「全体的にこの学校は自由だ」（『女子聖学院短大報』第五号）とも述べております。

このように、自由と人間尊重こそ女子聖短大の学風でありました。こうした学風の中で教師たちは全人教育への情熱に燃えておりました。こうした中から今日のフレッシュユマン・オリエンテーション(FO)の前身としての「軽井沢スクール」(二泊三日)が開始されることになります。それは、短大開学四年後の一九七一年四月のことでした。このプログラムについて佐藤正義教授は次のように述べております。「ここに於いて、たとえば、学生数が増大しようとも、本校の教育の中心である、人間教育、そのための教授と学生の心の触れ合い、学生同志の友情をいささかも失うことのないように、手をつくしたいというのが、この軽井沢スクールの発端であつた」(『女子聖学院短期大学十年の歩み』三五—三六頁)。「教師と学生、学生と学生との間の相互理解を高め、相互信頼を深めることが知識教育のみならず人間形成を目的とする真の大学教育の出発でありましょう」(軽井沢スクール葉)。

以上のように、女子聖短大は、自由と人間尊重の学風においてスタートしたわけですが、同時に関係者たちは伝道に対する熱い情熱をもっておりました。キャンパス内の教職員住宅に住んでいたクリスチャンたちは当初日本基督教団大宮教会で聖日礼拝を守っておりましたが、一九六九年四月、寮生への伝道を考慮して学内聖日礼拝を開始しました。これに続いて、一九七〇年二月一三日には、日本基督教団滝野川教会宛、次のような伝道所開設を要請する請願書が出されたのです。「昭和四四年四月より大宮市日進町三一三五七、学校法人女子聖学院短期大学校内においてもつばら、校内に居住する教職員並びにその家族および寮に生活する学生を対象として聖日礼拝を守って参りました。これは将来も存続させる予定でありますが、学園内の集会であるために教会性に乏しい。例えば、受洗希望者が出た場合の処理、聖餐式の執行、結婚、葬式などの一身一家の出来事等、責任の所在が明らかでない。また地域社会に対する福音の宣教という課題も学園内の集会という限度を超えております」。

キリスト教大学として制度的確立と発展

以上、さいたま上尾キャンパスの初期のキリスト教学校としての学風を見てきましたが、以下において、キリスト教大学として制度的に確立され発展するいくつかの局面に触れたいと思います。その第一が宗教主任制度です。これは、一九七一年秋、二代目の宗教部長高橋泰二牧師が伝道牧会への復帰のために辞任することを表明したことがきっかけとなりました。理事会は、高橋牧師の後任としてディサイプル派の伝統を継ぐ小倉義明先生を推薦しました。当時、小倉先生は滝野川教会の副牧師でありました。ところが、滝野川教会としては、すでに小倉先生を大木牧師の後任とすることを総会で決議したばかりでありました。そこで大木牧師とクレーラ学長との話し合いとな

るのですが、ここにおいて大木先生は、小倉先生を宗教部長としてではなく宗教主任として立てるべきだという提案をされたのです。これが本学における宗教主任制度のことの始まりでありました。

宗教部長は教授会組織の中から選出され、任期が来ると別の担当者になることになります。こうしたやり方でもキリスト教教育や活動の企画運営は行うことができるものの、職制上教授会および本学全体をキリスト教に基づいて指導助言する立場にはありませんでした。そこで、キリスト教大学を形成するためには、学長を補佐しながら教授会および学校全体に対してキリスト教的指導のできる職制が必要であったわけです（『あゆみ』七七頁）。

こうして小倉先生が第一代目の宗教主任として就任するわけですが、教授会を構成する教員たちにとって、宗教主任という職責がどういうものであるかを理解できないということもしばしば見られたようです。それだけに、小倉先生は、一代目の宗教主任としての苦労を背負うことになるわけです。先生は次のように述懐しています。「宗教主任としての第一の仕事は、キリスト教的な内実を高めること、教會的な信仰を学校の中でも高めることであつた。しかし、これを追求しようとして様々な軋轢や誤解に直面した。宗教主任の仕事は学長を助けながら学校全体の和を作ることである。しかし宗教的なものを強調することにより、かえって、対立を生ずることもあり、宗教主任としての二律背反的な側面を経験した」（『女子聖学院短期大学の歩み一九六七—一九九三』七七頁）。しかし、宗教主任と共にキリスト教教育や活動を担おうとする熱心な教員たちによつて宗教委員会が組織され、そこから、今日の聖学院大学に受け継がれているようなキリスト教活動の一つ一つが提案され、確立されることになるのです。

発展の第二は、宗教センターの創立です。教授会記録によりますと、クレーラ学長は、第一七五回教授会にて緑聖伝道所開設（一九七六年四月）の報告をし、緑聖伝道所を本学の宗教センターとする旨の発表をしました。しかし、緑聖伝道所開設当初は、宗教センターの組織や活動内容についての検討が充分に煮詰まっておらず、実際に

宗教センターが開設されるのは一九七九年のことでした。ところが、教授会の中には、学校は伝道するところではないという強い意見があり、必ずしもスムーズには行かなかったのです。熟慮の末、教授会とは別組織にしつつも教授会から遊離したものとし、新しい組織とすることになりました。まず、運営委員長にはクレーラ学長、宗教センター所長は小倉宗教主任、幹事は緑聖伝道所濱田牧師、この他に学長が教授会で任命した数名が運営委員（任期制）となり、宗教センター運営委員会が組織されました。

こうして開設された宗教センターは、一九八八年の大学開設と同時に機構改正が行われました。そのねらいは、女子聖短大と聖学院大学両者のキリスト教教育および活動における一体化を図ることにありました。キリスト教教育や活動において、短大と大学のそれぞれの固有性を生かしながら、上尾キャンパスとしての一体化をはかることがこの宗教センターに課せられた大きな課題でありました。そして、実際、宗教センターは、これまで以上に上尾キャンパスの形成のために大きな指導力を発揮することになりました。それは、制度的には、短大・大学両教授会に優先する組織として位置づけられたことに加え、近藤勝彦先生が所長としてのご指導をくださったことが大きかったと思われます。

因みに、機構改正により、これまでの「宗教センター運営委員会」は「宗教センター委員会」と改称され、委員会は宗教センター所長のもとに両学長、両宗教主任、宗教センター幹事（緑聖教会牧師）、両大学の教授会組織の宗教委員会、事務局長、および委員会が必要と認める委員をもって構成されることになりました（『あゆみ』九一頁）。

また、発展の第三は、先のことと年代は前後しますが、一九八六年三月のキリスト教概論の教科書『神を仰ぎ人に仕う』の出版であります。これもキリスト教大学としては画期的な試みでありました。第四に、一九八八年の大学の設立と共に、キリスト教科目カリキュラムの拡充がなされたことも大きな発展の一つです。一年生はキリスト

教概論（必修）、二年生はキリスト教関連科目（選択必修）、三年生はキリスト教社会倫理（必修、現在はキリスト教文化、キリスト教人間学）。短大も一九九〇年度より二年生でキリスト教関連科目を導入することになりました。これに伴い大学生は一〜三年次までの三年間、短大生は二年間、全学礼拝出席（一学期三回）、教会出席（一学期二回）のレポートを提出することになりました。因みに、短大時代には、一年時のキリスト教概論との関係だけでこれら二つのレポートが義務づけられていたに過ぎません。それでも、教員の間には、キリスト教を強制するものとしての反発が見られました。

聖学院大学の歴史的意味——いわゆる道德感化的キリスト教教育の限界を越えて

ところで、日本のキリスト教教育の流れの中には、制度化を嫌い、人格的な感化をもつてするのがキリスト教教育だとする考えが根強く見られます。先に紹介した小田先生の文章もこうした傾向を強く示しているものではないでしょうか。同様な傾向は、たとえば、新渡戸稲造にも見られます。彼は、伝道者内村鑑三と自分を比較して次のように記しております。「内村のように」言葉をもちて神学を語るものではない。人格からにじみ出る犠牲と奉仕の心をもつて示す」と。ここでは「神学」と「人格から滲み出る犠牲と奉仕の心」とが対照されているのです。人格からにじみ出るものが感性的なものであるとしますと、神学は理性的なものであり、言葉による説得、強制、押しつけをするものというイメージで捉えられているのです。すなわち、言葉による説得、強制、押しつけとは異なり、人格からにじみ出るものによって自ずから感化を与えて行く教育こそがキリスト教学校にふさわしいというわけです。

また、新渡戸は、キリスト教学校がキリスト教的な形式に走ることを批判して次のように述べております。

「此の学校はご承知の通り我が邦に於ける一つの新しい試みであります。従来我邦の教育は兎角形式に流れ易く知識の詰め込みに力を注ぎ、人間として、又一個の女性としての教育を軽んじ、個性の発達を重んぜず、婦人を社会而も狭苦しき社会の一小機関と見做す傾向があるに対して本校に於いては基督教の精神に基づいて個性を重んじ世の所謂最小者をも神の子と見做して、知識よりも見識、学問よりも人格を尊び人材よりは人物の養成を主としております。世には往々基督教を標榜する学校とさえいえば徒らに宗教的形式を以て学生の言行を抑制してただ窮屈な頑迷な信者を輩出する場所の如く思ふものも少なくありませんが、本校の目的とするところ且又、教育の方針は御存じの通り形式に拘泥することなく規則の如きは殆どあるやなきやの如く、教ふる者も学ぶ者も共に神の前に於いては高きも卑しきもなき平等なる僕婢の如き心を以て師弟の間に精神的の連絡を保ち学生相互の間には姉妹の愛情を以て交わり、打ち溶けて淡やかな、のんびりとした温かき心地が全校に満ちている」。

ところで、聖学院大学は、その設立に際して「聖学院大学の理念」を明らかにしましたが、小田先生や新渡戸が語っている意味での「人格的な感化」とはいささか異なっております。先にも記しましたように、感化ということをご否定すべきではありません。問題は、感化を強調しクリスチャン教員や職員の信仰的な資質に依存するだけでキリスト教学校がそのキリスト教的な本質を維持できるかということなのです。指導力のある熱心なクリスチャンがいてその学校をリードしている間は何とか維持されるかも知れません。しかし、そうした指導者が不在となった時、その学校はキリスト教としての内実を喪失するということになりかねないし、事実、日本のキリスト教学校はそういう状況にしばしば直面させられているのではないのでしょうか。

聖学院大学は、大学としての「理念」を明らかにすることによって、自らの立つべきところを明確にし、これにそってキリスト教大学としての内実ある取り組みをしたいと願っている大学であります。十力条からなる理念の中から最初の二力条を取り上げたいと思います。

第一 大学は、プロテスタント・キリスト教の精神に基づき、自由と敬虔の学風によって、真理を探究し、霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成に努め、人類世界の進展に寄与せんとする者の学術研究と教育の文化共同体である。

プロテスタントであること、そして学問の探求だけではなく、「霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成に努める」。この点は、先人たちも求めた人間尊重の精神をより明確にしているのではないのでしょうか。

第二 本大学は、プロテスタント・キリスト教の伝統に即してなされる礼拝を生命的な源泉とする。礼拝においては、聖書と宗教改革が証しする福音が語られ、そこから大学共同体にとつての生命である研究と教育のために自由と責任、および伝道への活力、さらに本大学の伝統を継承し新たに創造する喜びと熱意とが与えられる。

この理念は、先にも記しましたように、自由や人格的な感化を否定するものではありません。しかし、「プロテスタント・キリスト教の伝統に即してなされる礼拝を生命的な源泉とする」という点で、「人格的な感化」を越えるものであります。さらに、この第二条が、「聖書と宗教改革が証しする福音が語られる」ことの大切さを力説している点も注目すべきではないでしょうか。キリスト教学校としての自由で敬虔な雰囲気も大切です。しかし、それだけではなく、具体的に礼拝が行われていることであり、のみならず人を生かす福音が説き明かされていることが重要なのです。

こうして制度的に整えられて来た聖学院大学でありますが、このキャンパスの初期の時代に關係した人々が今のキャンパスの姿を見る時に何というでありましょうか。私見をもつてすれば、浅原六郎教授は、やはり、次のように言われるのではないでしょうか。「この大学では、学長はじめ、教職員すべてが、権力的でなく、さわやかに人間的で、厭味がない。キリスト教の信仰があるか、ないか、こんなことに關係なく、皆いい人柄だ。」と。その一つの印は、受験生たちの多くが、オープン・キャンパスで奉仕している学生たちの姿を見て、聖学院を受験すべく決断をしていることにあります。そのような思いで入学して来た学生の幾人かに聞いて見ますと、学生たちが教員や職員に命令されて動いているというのではなく、自由にのびのびと仕事をしている姿が印象的だったということです。もう一つは、高校の先生方から、「模擬講義に来てくれる聖学院大学の先生方は、ただ専門の講義をして行かれるだけではなく、生徒たちへの語りかけがあつて良い。」という評価をいただいていることです。ここに、このキャンパスの中に人間尊重の精神が今も豊かに流れていることの印があるのではないのでしょうか。すなわち、先生方は、普段から学生たちと向かいあつているということではないのでしょうか。高校の模擬授業においては、そうした普段の姿勢が現れるのではないのでしょうか。

聖学院大学は、キリスト教大学としての制度を整えることにおいて、この日本における一つの大きな貢献をさせていただいていると言えないでしょうか。聖学院諸学校が、後世に残るそして日本のキリスト教学校の形成に寄与する諸学校として発展できるよう、お互いに折りつつこれからも貢献して行きたいと思ひます。

(二〇〇六年三月二七日 キリスト教センター研修会にて)